的な疾患の一つである．最近われわれは，本症例の4例を経験した．症例は17歳，14歳，9歳，13歳のいずれも男性で，それぞれ右股関節痛，左股関節痛，右肩関節運動制限，左大腿部痛を主訴として本学整形外科を受診した．骨X線写真で3例は大腿軟部に，一例は両側胸部および背部中央に石灰化像を認めた．骨シンチグラフィーで同部に一致して集積を認めた．全例に化骨部切除術が施行され，組織学的に化骨性筋炎と診断された．経過観察中に，一例再発が見られ，骨シンチグラフィーで再発部に集積が認められた．以上4例の骨X線写真と骨シンチグラフィーの比較検討を行い，若干の文献的考察を加えて報告した．

17. ^{67}Ga シンチにおいて肝への集積に異常を認めた症例の検討

神田　哲朗　檀浦龍二郎　吉居　俊朗
河内山政彦　田渕　昭典　鴛渕　雅男
菊池　茂　森田誠一郎　大竹　久
（久大・放）

昭和54年1月より昭和58年10月までの間に久留米大学病院RI臨床部門において施行したGaシンチグラフィーのうち，肝への集積に異常を認めた45症例51病変を対象とした．肝への集積がびまん性に明らかに増加しているものをびまん性集積増加，肝の輪廓が不明瞭となったものをびまん性集積低下，周囲肝よりGa集積の高いものをhot nodule，低いものをcold noduleと分類し，検討し次の結果を得た．

1. hot noduleを呈するものにhepatomaが多かった．
2. びまん性に集積低下を呈したものは，肝硬変，多発性転移性肝癌であった．
3. 最大径5cm以下の腫瘍ではhot noduleが，5cm以上のものはcold noduleが多かった．
4. hypervascular tumorはhot nodule, hypovascularなものはcold noduleが多かった．

座長のまとめ（演題18～21）

一矢　有一　（九大・放）

中條（鹿大・放）は褐色細胞腫2例を含む11例に^{131}I-MIBGによるシンチグラフィを行い，褐色細胞腫の陽性描画ができたことを報告した．本薬剤は正常の鼻部へも集積することを示し，また神経芽細胞腫の骨転移への集積例も呈示した．

島田（鹿大・放）は右副腎の褐色細胞腫の一例で，^{201}Tl-Clによるシンチグラフィで陽性に描画できた症例を報告した．

高木（熊大・放）は悪性黒色腫における肝，骨およびガリウムシンチグラフィについて報告した．本症では遠隔転移が多くみられ，これらの検査で異常を呈する頻度がきわめて高いことを述べた．

綾部（九大・放）は^{131}I標識モノクローナル抗CEA抗体を用いて，ヌードマウスに移植したヒト大腸癌の陽性描画を報告した．血液プール像との鑑別のために，^{99m}Tc-HSAスキャンニングの併用が必要であり，またスキャン時期は96時間が適当と述べた．

18. 交感神経・副腎髄質親和性スキャン剤 ^{131}I-MIBG (metaiodobenzylguanidine) の使用経験

中條　政敬　島袋　国定　城野　和雄
宮路　紀昭　島田受理夫　坂田　博道
吉村　広　田口　正人　篠原　慎治
（鹿大・放）
岡田　淳徳　禧久　豊嗣　（同・放部）

^{131}I-MIBGはミシガン大学で開発された交感神経・副腎髄質スキャン剤であり，すでに褐色細胞腫の検出に有用であることが報告されている．今回，本邦で合成・標識された^{131}I-MIBGの使用機会を得たので，対照6例，カテコラミン産生腫瘍2例，自律神経障害患者3例の計11例を対象に臨床的検討を加えた．対照例での血中クリアランスは速やかで，5分値に対するT1/2は15～30分の間にあった．尿中排泄率は平均1日目56%，3日間で73%であった．イメージ上の生理的集積部として唾液腺・鼻部・心・肝・脾・膀胱が認められた．褐色細胞腫と術後神経芽細胞腫骨転移が陽性描画された．Shy-Drager症候群1例では膀胱を除く生理的集積部がほとんど描出されなかった．また自律神経障害例では対照例に比し，4時間目までに心・肝のactivityが急速に減少し，specific uptakeが少ないことが示唆され，^{131}I-MIBGはadrenergic neuropathyの診断にも有用と考えられた．

Presented by Medical*Online